



禁少女

かんきんしょうじょ

著：春風栞

画：ボチ加藤

原作：クレージュA



ぶちばら文庫



『ま、待って、待って下さい！ い、挿入れるのだけは……っ！』
『いつまでもガタガタと煩いな、もう遅いんだって気付けよ！』
私のあそこに、男の人の物が触れる感触があった。
次の瞬間、あそこに当たっていた物がグッと押し込められる。
「んぐっ……んんっ……！」
固くて熱い肉の塊が、入り口を押し開けて入ってくる。
「ほら、入ってくぞ！」
「や……止めて……うぐっ……んはあっ！」
体の中で何かが弾け飛び、強烈な痛みと圧迫感が私を襲う。
(な、なにこれ……痛い……痛いよ！ お母さん、お母さんっ！)

ちとせ Chitose

母親に命じられるまま、男たちに奉仕して家計を助けてきた健気な少女。境遇を悲しみつつも、母を思いやる優しさを持っている。

最近、さらに胸が大きくなってきたのは、やっぱり男の人に触れられているからだろうか。

(やだな……)

胸が大きくなりすぎると、男の人たちにジロジロと見られてしまう。お客さんたちは喜んでくれるけれど、私にとっては辛いだけだ。

(それに……感じやすくなるのも……嫌)

胸が成長していくのに合わせて、どんどん敏感になってきているような気がする。胸や乳首だけじゃなく、それ以外の場所でも同じだ。

「はあ、はあ、はあ……うんっ……んんっ……！」

体の成長は私にとって恐怖ではない。

これからもっと成長していったって、大人の女の人の体つきになっていけば、男の人たちはもっと私を責めてくるだろう。

今よりもっと、色々といやらしいことをされるのだ。

私はそうなってしまうのが怖くて堪らない。

「んくっ……ふぁあっ……！」

きつと私はそれを受け入れるしかなく、やがてその辛さにも慣れてしまう。

初めて男の人に触れたときの嫌悪感が、今では薄らいでいるのと同じように。



「ああ……ん、んんう……あつ、あんっ……あふう……」
 やはり今日の私は少し変だ。

様々な思いや感情が込み上げてきて、頭の中が色々なものでいっぱい埋め尽くされている。

ただ、体だけはしっかりとおじさんのことだけを感じていて、それだけが普段と変わらない気がした。

そうやって触れられていると、不意におじさんが口を開く。

その言葉に私の心も現実へと引き戻された。

「おい、本当に感じてるのか？」

その声は疑問を抱いているというより、どこか苛立ちのようなものを感じさせた。

「は、はい……感じて……ます」

他にどう答えていいのかわからず、とりあえず無難な受け応えをする。

頭の中は他のことでもいいだったけれど、体はちゃんと感じていたと思う。

（気持ちよくなつてた……よね、私）

おじさんはそれで納得したのか、無言で小さく頷きながら、男の人らしい太く逞しい指で私の乳首を弄ぶ。

現実を意識したせいなのか、それまでよりも体の感覚が鋭くなったような気がする。

指先の刺激に、思わず声が漏れてしまった。

「んふう……はあ、はあ……んっ……んはあ……ああんっ」

自分では望んでいないことなのに、触れられれば体は勝手に反応する。

おじさんの指で刺激されて、乳首が固くなっていくのが凄く恥ずかしくて嫌だった。体が反応するのも嫌だったし、声を出すのも嫌だった。

でも、何も考えないようにして、ただ耐えているだけで叱られてしまう。

これが私の役目なんだと自分に言い聞かせて、少しでも声を出そうと努力した。

「あ……んう……はあ……はあ……んっ……うう……」

何度も会っている男の人なら、どうすれば喜んで貰えるのかわかっている。でも初めて会ったこのおじさんは、ずっと冷たい目をしたままだ。

（私のこと、気に入らないのかな……）

もし気に入らなくて帰されたら、お母さんに叱られてしまう。

そんな不安を抱いていると、おじさんがまた不意に口を開いた。

「いつからだ？」

「え……？」

「いつから男を相手に股を開いてるんだ？」

「そ、それは……あの……」

おじさんの言葉はとても冷たくて、私の心を鋭く抉ってくる。
そして私とその問いに答えられずにいると、おじさんの手が下着の上から私のあそこに触れた。

「なんだ答えられないのか？ フン、まあいい。どうせすぐにわかることだから」

「んくっ……！」

太い指が、下着の上からあそこをゆっくりとなぞる。

いつも男の人に触られているけれど、初めての人が相手だと緊張してしまう。

「乳首もすぐに固くなるし、ここもすぐに湿ってくる」

「あうう……はあ……はあ……」

おじさんの言う通り、奥の方からじわつと愛液が染み出してくる感覚があった。
頭では嫌だと思っけていても、もう体は勝手に反応してしまうようになっていく。

指の動きに反応して、じわじわと心地よさが体の奥から広がっていく。

「男たちに開発されたのか、それとも自分でか？」

「そ、そんな……んんっ……わ、私……開発なんて……」

「こんなに乳首を勃たせておいて、よくそんなことが言えるな！」

そう言った声には、凄く嫌な響きが混じっていた。

色々な男の人の相手をするけれど、こんな話し方をする人は初めてだ。

なんだか得体の知れない恐怖感のようなものが、私の胸に込み上げてくる。

（この人……ちよつと怖い……）

後でお母さんに叱られるけれど、気に入られずに帰されてしまった方がいい。

そんな気になってしまいうくらい、私は胸騒ぎのようなものまで感じ始めていた。

「まあ、こっちが敏感なのは当たり前か」

「きゃふっ……！」

おじさんの指先が、下着の上から小さな突起を捉える。

体のなかでも最も敏感な部分を、その指先が巧みに刺激してきた。

甘く蕩けるような快感が広がって、私の意識がそつちへと引つ張られそうになる。

「あ、ああっ……やあんっ……！」

私が反応してしまうと、おじさんは更に集中してその突起を責めてきた。

恥ずかしくて堪らなかつたけれど、自然に甘い声が漏れ出してしまふ。

「あつ、あんっ……んんっ……はあつ……！」

「ほほう、クリの感度もいいじゃないか」

「やつ……あうんっ……くふうっ……！」

おじさんの指先は執拗に、そこを集中して責めてくる。

電気が走るような快感が広がって、奥の方から熱い雫がじわつと染み出してくるのがわ

かった。

（ああ……濡れちゃうっ……）

この行為に反応しなければ叱られてしまう。

頭ではそうわかっていても、指に反応してしまう体が恥ずかしい。

「うくっ……ん、んはっ……ああんっ……！」

心は冷めているというのに、体だけはどこまでも熱くなる。

「あっ、ああっ……やつ……んんっ……はうっ！」

気が付くと溢れ出した熱い雫が、下着を濡らして薄っすらと透けさせていた。

固くなってしまった突起も浮き出て、とてもいやらしく見える。

おじさんもそれを見逃さず、指の腹で強く擦るように刺激してきた。

「あっ、あっ、あっ、あっ……くふうんっ！」

下着の上から触れられているだけに、甘く痺れるような快感が溢れてきて、体から力が抜けていく。

「いい声だな、ここがそんなに気持ちいいか？」

「くうっ……は、はい……」

少しだけ迷ったけれど、私はその言葉に小さく頷いてしまう。

恥ずかしかったけれど、感じてしまったのは事実なのだ。

「あ、ああっ……んんっ……はあ、はあ、はあ……ひうっ！」

私を感じているとわかれば、きつと機嫌をよくしてくれる、そんな淡い期待もあった。しかし、おじさんの声は更に冷たくなる。

「まったく、スケベな小娘だな。どれだけ男を知ってるんだよ」

「うう……んくっ……ふあっ……ううんっ……！」

その質問にどう答えていいのか、私にはわからなかった。

色々な男の人の相手をしてきたけれど、まだ最後まで許したことは無い。

もちろんこの先も、それだけは絶対に守っていくつもりだ。

そんな私が、本当に男の人を知っていると云えるのだろうか。

そう考えると、私は何も答えられなかった。

「ふふん、確かめてやるか」

「え……」

何も答えられない私にそう言うと、おじさんはいきなり背中を押した。

「あっ……！」

そのまま前に倒れこむようにして、四つん這いにさせられた。

（な、何をされるの……!?）

あまりに唐突すぎて、私は狼狽してしまった。

初めて会う男の人の部屋で、まさかこんな状況になってしまふなんて。私はとにかく不安で頭がいっぱいで、どうしていいのかわからなかった。

「な、なにを……」

不安を堪えきれず、背後のおじさんを振り返るようにして尋ねてみる。

しかし、おじさんは何も教えてはくれず、その声にはそんな私を嘲笑うかのような響きが含まれていた。

「何をつて？ そんなことお前もわかつてるだろ」

「いえ……わ、わからないです……」

「純情ぶって俺の気を惹くつもりか？ まったく、そうやって何本も啜え込んだんだろ！」

どうしてそんなことを言うのか、私には本当にまったく理解ができなかった。

嘘ではなく、私は本当に最後まで経験したことが無い。

それだけではずっと守り続けてきたのだ。

「違いますっ、私、それだけはしてないんです！」

込み上げてくる恐怖心に煽られて、とにかく信じてもらえようと、必死になって訴えた。

しかし、おじさんは私の言葉にはまったく聞く耳を持たずに、後ろから私の体へと触れ

てくる。

「嘘を吐くな！ 体を売るつてのは、そういうことだろ！ 淫売のくせに生意気な口をきくな！」

「そんなっ……！」

そう言っただけのお尻を下着ごと乱暴に掴む。私は罵られたこともショックだったけれど、むしろ乱暴に扱われてしまうことに怯えた。

「い、嫌あつ！」

おじさんが何をするつもりなのか、私はようやく理解した。

いや、薄々とはわかっていたけれど、それを認めてしまうのが怖かったのだ。

「やつ、やだっ……くうっ……！」

そして理解するのと同時に、背筋が震えるような恐怖が全身を支配する。

（嫌だ……それだけは絶対に嫌なの……！）

体中を触られたり、舐められたり、或いは私が



舐めたり。

そんなことを繰り返してきたけれど、これだけは絶対にしないと心に決めて、今までずっと守ってきた。

おじさんはそれを、強引に私の手から奪おうとしている。

「お願いします、許して！ 許して下さい！ それだけはっ……！」

「何を許して欲しいんだ？ 俺がいまから何をするのか、本当にわかっているのか？」
「うっ……」

ここでちゃんと答えられなかったり、時間がかかってしまうのは危ない。

目の前に迫っている危険を知らせるかのように、背筋を冷たいものが一筋、二筋、流れて落ちていく。

「セ……セックスですっ……そ、それだけは……しないって……や、約束で……」
この人だって、お母さんから聞かされているはずだ。

どんなことをしても構わないけれど、セックスだけはしないと。

私は最後の望みをかけて、交わしているはずの約束を持ち出す。

しかし、私の希望はあっさりと踏み躪られた。

「約束ねえ……そんなものした覚えがないな」

「で、でもっ……絶対にお母さんがっ」

「覚えが無いって言ってるだろ？」

おじさんはわざとらしくとぼけてみせる。

そんなはずはない、お母さんは絶対に約束してくれているはずなのだ。

しかし、それを言っても、またとぼけられてしまうだけだろう。

ちゃんと約束していたとしても、その約束を守る気がないのだ。

（ひどい……）

だがこれで諦めてしまうわけにはいかない。

私は必死になって抵抗し、おじさんへと懇願を続ける。

「お願いしますっ、他の……他のことなら何でもしますからっ！」

「勝手なことを言うな！ ここまできたら、男はもう止まれないんだよ！」

「そ、そんなっ……いやっ……わ、私……まだ処女なんです！ だから許してください！」

恥ずかしさを堪えて、まだ経験が無いことを理由に許しを願った。

それでもおじさんは取り合ってはくれず、下着の底の部分を横にずらして、私のあそこに触れた。

「もうちょっと濡らした方が入れやすいか」

「いやあっ……！」

私のあそこに触れると、そう言っ指を動かし始めた。

このままだと、このおじさんに挿入れられてしまう。

大切に守ってきた私の初めてを、こんな形で強引に奪われてしまうなんて。初めてを奪われてしまうと思った瞬間、一気に恐怖が私の体を支配した。四つん這いになった手足が震えて、体を支えるのさえ辛くなってしまった。

「い、嫌……嫌ですっ……何でもしますから、それだけは許して……ああ……お願いします……」

すぐにでも逃げ出したかったのに、あまりの恐怖で体がまったく動かない。怖くて怖くて堪らないのに、体はまったく私の言うことを聞いてくれない。

「何でもするんだな？　じゃあ、ブチ込んでやるよ」

「そんなあっ！」

もう何を言っても無駄なのかと、私の中に焦りが生まれる。

この人は冗談なんかじゃなく、本気で私に挿入するつもりなのだ。

それが伝わってくるだけに、緊迫感のようなものに襲われて、私は焦るばかりだった。

（ど、どうしよう……このままだと私……！）

大切に守ってきた初めてが、今にも奪われてしまいそうだ。

何とかして許してもらえる方法は残っていないかと、必死になって頭を働かせる。

でも、焦りばかりが募ってきて考えがまとまらず、頭の中には何も浮かんできてはくれ

なかった。

そうしている間にも、ベルトを外してズボンを下ろす音が聞こえた。

「ま、待って、待って下さい！　い、挿入するのだけは……っ！」

「いつまでもガタガタと煩いな、もう遅いんだって気付けよ！」

「ひっ……！」

私のあそこに、男の人の物が触れる感触があった。

その感触に怯えて逃げ出そうとする私を、おじさんの手が強引に押さえ込んでしまう。

そして次の瞬間、あそこに当たっていた物がグッと押し込められた。

「んぐっ……んんっ……！」

固くて熱い肉の塊のようなものが、私の入り口を強引に押し開けて入ってくる。

「あ……あ……ああ……ひぐうっ！」

「ほら、入ってくぞ！」

「や……止めて……うぐっ……んはあっ！」

おじさんが楽しそうに言うのと同時に、その熱い肉の塊が一気に私を貫いた。

体の中で何かが弾け飛び、強烈な痛みと圧迫感が私を襲う。

（な、なに……これ……痛い……痛いよ！　お母さん、お母さんっ……！）

口からは言葉どころか声すら出せず、息をすることさえも辛かった。



知らない間に目からは涙が溢れ、頬を伝って流れ落ちている。

「ああ……く、苦しい……!!」

「これで全部だ……そら!!」

「ひぎいっ!!」

熱い肉の塊はそのまま体の奥まで捻じ込まれて、強烈な圧迫感が私の下腹部を襲った。

包丁で指先を切ったときのように、あそこの奥がドクン、ドクンと脈打っているような、そんな感覚が伝わってくる。

ぶちばら文庫

姦禁少女

(かんきんしょうじょ)

2010年 10月29日 初版第1刷 発行

■著 者 春風菜
■イラスト ポチ加藤・八尋ぼち
■原 作 クレージュA

発行人：久保田裕
発行元：株式会社パラダイム
〒166-0011
東京都杉並区梅里2-40-19
ワールドビル202
TEL 03-5306-6921

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©SHIORI HARUKAZE ©CourregesA

Printed in Japan 2010

PP003

Temptation 2

ふちばら文庫07
春風菜 著
唯々月たすく 画
Parthenon 原作
定価 650円(税込)



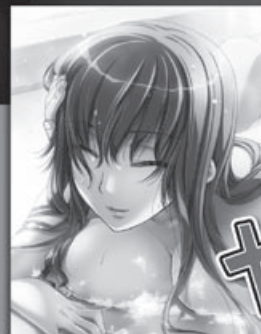
12月上旬 発売予定!

描き下ろしアフターを
今回も収録予定!



12月上旬 発売予定!

ふちばら文庫05
沖田和彦 著
すめらぎ琥珀 画
あるてみす。原作
定価 670円(税込)



姉のSummer! 2

シュガー・スパイス Sugar+Spice 2

What are little girls made of?
What are little girls made of?
Sugar and spice
And everything nice,
That's what little girls are made of.

ぶちばら文庫04
森崎亮人 著
ぎん太 画
チュアブルソフト 原作
定価 670円(税込)



挿絵もすべて、
描き下ろし!

11月2日発売予定!

Chuable

SDイラスト: 曲本

「ぎん太」画
「森崎亮人」著

描き下ろしアフターストーリー!

ヒロインそれぞれの
ラブラブエッチな4話を収録!

Temptation

～催眠の奈落～



ぶちばら文庫02
春風葉 著
唯々月たすく 画
Parthenon 原作
定価 650円 (税別)

好評発売中



ぶちばら文庫01
沖田和彦 著
すめらぎ琥珀 画
あるてみす。原作
定価 670円 (税別)

好評発売中



特別収録!

書き下ろし アフターストーリー!
姉、spring!

姉、spring!
かみ♡まーり

ぷちぱら文庫は ライター&イラストレーターを募集中です!

「ぷちぱら文庫」シリーズを盛り上げる、新たな作家を募集いたします。「ぷちぱら文庫」は、ゲームノベライズだけでなく、オリジナル創作による美少女小説も刊行予定です。

応募規定は、それぞれ以下ようになります。

皆様のご応募をお待ちしております！

1. 募集内容

「ぷちぱら文庫」シリーズでは、美少女ゲームやライトノベルを好む読者層へ向けた作品作りを目指しています。ご応募いただく場合も、ヒロインの個性や魅力が伝わるようなもの、シチュエーションへのこだわりが感じられるものなど、はっきりしたテーマのある作品でお願いいたします。題材はとくに限定していません。発表済か、未発表作品かも問いません。

2. 送付方法

小説の場合は、テキストデータをメールでご応募ください。コミックやイラストは、原稿用紙をお送りいただいても、データをお送りいただいても結構です。データが5MB以上の場合は、ファイル転送サービスなどをご利用ください。コミックには枚数の規定はありません。小説は1ページを17行×40文字として、50ページ以上の作品をお送りください。

3. 選考結果などについて

メールでご応募いただいた場合は、着信のご連絡は必ず行っています。選考は随時行っており、締め切りはとくにございません。選考終了後、採用の方へのみ別途お返事をしております。通常はお返事までに、2週間～1か月ほどお時間がかかります。

4. 作品の送付先

ご郵送の場合は下記住所までお送りください。メールでのご応募は以下のアドレスで受け付けております。どちらの場合も必ず「お名前、年齢、ご職業、ご住所、電話番号」を書いた紙を同封するか、明記してください。
メールの宛先: desk@parabook.co.jp

〒166-0011 東京都杉並区梅里2-40-19 ワールドビル202
株式会社パラダイム 「ぷちぱら文庫作品応募」係

※ご応募の際の個人情報は、選考結果のご連絡にのみ使用いたします。

作品のご返却を希望の場合は、宛名を書いた返信用封筒と切手を同封してください。